

元代の大蔵経

本学教授 竺沙 雅章

一九九二年一二月に、本学で第七七回の大蔵会が行われました。その時に『漢訳大蔵経の歴史』という題で話をさせていただきました。それ以後六年半経っていますが、その間にも大蔵経の調査、研究は進んでおりまして、補正する部分も出てきました。今日の話は、前の講演の補足的な話、六年間の成果を紹介するという事にさせていただきました。ただ全般について話す時間的余裕もありませんので、特に元の時代に限って、大蔵経の問題を採り上げてみたいと思います。

元という時代は、一三世紀から一四世紀の中頃くらいまで、つまり北方民族のモンゴル族が中国全土を支配した時代です。この時代は仏教史では最後の隆盛の時期と言つて

よいかと思えます。概説書に書かれていますように、この時期はチベット仏教、いわゆるラマ教が隆盛でした。在来の仏教では禪宗が盛んであったと言われていますが、実は河北の方では法相や華嚴という、いわゆる教学仏教も盛んでした。それとともに幾つかの大蔵経が出版されています。しかし一般に大蔵経というのはあまり歴史書に記録されることが少なく、特に元の時代は実物が出てきてはじめてその存在が分かる、という部分が多いのです。

小野玄妙という『大正新脩大蔵経』の主編者がおります。『仏典研究』二一—三（一九三〇年）に掲載されている、この人の論文「元代松江府僧録管主八の刻蔵事蹟」のなかで、「従来元本の大蔵経と云へば、杭州路余杭南山大普寧寺の板経を指すことに定まっていた」と述べられています。元版と言えばこの普寧寺版と言われているものしか、この当時は知られていなかったのですが、小野玄妙は二、三の新出資料を、この論文のなかで紹介しています。

それ以後、現在までの間に、元の時代の大蔵経がそれ以外にも多く知られるようになってまいりました。現在の状況については、昨年『西大寺所蔵元版一切経調査報告書』（一九九八年）のなかに掲載した「元版大蔵経概観」で述べました。

ところで、われわれ中国のことをやっている者は「大藏經」といいながらもわけていますが、日本では「一切經」ということが一般のようです。この報告書を中心になつてゐる人々は日本の方ですので、表題も「一切經」になつてゐますが、私の論文の題名は「大藏經」にしています。中国でも昔は「一切經」と言つていましたが、唐の頃から「大藏經」という名称が出てきました。しかし、日本では奈良時代からずっと「一切經」と呼んでゐます。名称の違いが日中間でもあるということが、ここでも見られます。

元代大藏經の最初は『金藏』の補刻から始まります。金は元の前の王朝で、東北地方から起こつた女真族の建てた国で、中国の北半分を支配しました。そこで行われたのがこの大藏經です。この大藏經も文献には全然出てこなかつたので知られてゐなかつたのですが、一九三三年に山西省趙城県の広勝寺で発見され学界を驚かせました。現在は北京図書館にあります。この『金藏』は、崔法珍という女性が發願して、皇統九年（一一四九）から大定一三年（一一七三）までに、山西の南にあります解州の天寧寺を中心に開版されました。それが完成すると、大定一八年に当時の都であつた燕京（今の北京）の朝廷に進上されました。のちに版本そのものも燕京に運ばれました。この時の事情に

ついてはあまりはつきりしなかつたのですが、つい最近の資料によつて、進上された版本は最初に大昊天寺という寺に安置されたということが分かりました。その後まもなく同じ燕京にあつた弘法寺に移され、そこで印刷と補刻が進められました。一二一五年、燕京はモンゴル軍に攻略されましたので、以後モンゴル支配下に入りましたが、その時期になつても『金藏』の補刻は引きつづいて行われま

た。

ところで一九三三年に発見された『金藏』は「広勝寺本」と言い、中統元年（一二六〇）に印造されたものです。日中戦争が起こると山西地方は激戦区になりましたが、一九四二年、日本軍がこの『金藏』を持ち去ろうとしてゐるという情報が入つたために、当時の八路军がそれを四月二七日の夜中に持ち出して、太行山脈中に移動させる、ということがありました。解放後、各地を転々としたのち、現在の北京図書館に移管され、そこで調査が行われて、『中華大藏經（漢文部分）』一〇六冊が中華書局から出版されました。その底本には、この『金藏』が使われてゐました。したがつて現在われわれは、この『中華大藏經』によつて『金藏』の姿を見ることができるようになりました。

ただこの『大藏經』が発見されたことが、学界で非常に

大きな評判になったため、かなり海外に流出しました。特に日本に多数売り込まれたようで、方々の図書館等に入っています。京都大学人文科学研究所の梶浦晋君の調査によると、現在日本にきているとはつきり分かっているものが四一巻あるということです。京都大学には一八巻ほどあり、奈良の薬師寺にも十数巻あります。ですから、『中華大蔵経』のなかには、日本にきている部分は無いわけで、無い部分は別のもので補われています。

「広勝寺本」のほかに、一九五九年にチベットのサキャ北寺図書館で、憲宗六年（一二五六）に印造し、燕京の大宝集寺に寄進された経巻が三一部、五五五巻が発見されました。この方を「宝集寺本」と言います。どうしてチベットのサキャ寺にこういうものがあつたのかについては、元の世祖クビライに尊崇されたパスバが帰国する時に持ち帰つたのではないかと推測されています。この「宝集寺本」は現在、北京の民族文化宮図書館に所蔵されています。図一は「広勝寺本」の扉絵です。その右端には「趙城県広勝寺」と彫られています。図二は京都大学人文科学研究所にある「広勝寺本」『大般若経』巻四一七です。図三がチベットで見られた「宝集寺本」の扉絵で、「護法神王」という、いかにもチベット仏教的な絵がついております。

巻末には長方印が押されています。それには張從祿、妻の王從惠、娘の張氏が印造して京の大宝集寺に寄進したと記されています。宝集寺は元の大都にある名刹でしたが、現在は残っておりません。末行に丙辰の年六月と記されています。丙辰は一二五六年で、この時に寄進したということですから。

「広勝寺本」の『大般若経』巻四一七は人文科学研究所にきていますので、当然『中華大蔵経』にはこれは入っていません。ところが、幸いに「宝集寺本」の方はあります。ですから、図四は『中華大蔵経』からコピーしたものです。両方を比べてみますと、文字も全く同じですので、同じ版木で刷つたように見えます。ところが少しだけ違いがあります。一行目の「切」という字は、偏の下の方が「宝集寺本」は長く、「広勝寺本」は短くなっています。「宝集寺本」の方が先に印刷されていますから、こちらが古くて「広勝寺本」が新しいはずですが、非常によく似ていますけれども、そういう違いがあります。ですから、「広勝寺本」は後からもう一度補版した部分である、ということが分かります。こういうケースがほかでもあるのではないかと思えますが、日本にきている四一巻のなかでこういう比較ができるのは、人文科学研究所のものと天理図書館にある

「大般若經」ぐらいです。他のものには、重複するものがあります。このように「金藏」の場合、「広勝寺本」と「宝集寺本」という二種類のものがあることが分かり、比較もできることが分かってまいりました。

ところで、元の大蔵經においては、「弘法藏」が昔から



図一 広勝寺本扉画

大般若經卷第七 第三十 華字

是上是妙超勝一切世間天人阿素
 洛等復次善現若眼觸是真如非虛
 妄無變異不顛倒是實是諦如所有
 性一切常恒無變無易有實性者則
 此大乘非尊非勝非上非妙不能超
 勝一切世間天人阿素洛等善現以
 眼觸是所計是假合有運動乃至一
 切無常無恒有變有易都無實性故
 此大乘是尊是勝是上是妙超勝一
 切世間天人阿素洛等善現若耳鼻
 舌身意觸是真如非虛妄無變異不
 顛倒是實是諦如所有性一切常恒
 無變無易有實性者則此大乘非尊
 非勝非上非妙不能超勝一切世間
 天人阿素洛等善現以耳鼻舌身意
 觸是所計是假合有運動乃至一切
 無常無恒有變有易都無實性故此
 大乘是尊是勝是上是妙超勝一切
 世間天人阿素洛等復次善現若眼
 觸為緣所生諸受是真如非虛妄無
 變異不顛倒是實是諦如所有性一
 切常恒無變無易有實性者則此大
 乘非尊非勝非上非妙不能超勝一

図二 広勝寺本『大般若經』卷417



図三 宝集寺本扉画

問題になっていきます。元の世祖クビライは大蔵経に対して非常に関心を持っていました。弘法寺にある蔵経の版本を諸山の師徳に命じて校正させたという記事があるほか、大蔵経の校訂を至元二二年（一二八五）から二四年にかけて行われました。これは同じ仏教の經典でありながらチベットと中国と別々に伝承されてきたので、この間にかなり違いがあるのではないかとクビライは思っており、天下の名徳を集

大般若經 卷第四

是上是妙超勝一切世間天人阿素洛等復次善現若眼觸是實是諦如所有性一切常恒無變無易有實性者則此大乘非尊非勝非上非妙不能超勝一切世間天人阿素洛等善現以眼觸是所計是假合有運動乃至一切無常無恒有變有易都無實性故此大乘是尊是勝是上是妙超勝一切世間天人阿素洛等善現若耳鼻舌身意觸是實是諦如所有性一切常恒無變無易有實性者則此大乘非尊非勝非上非妙不能超勝一切世間天人阿素洛等善現若耳鼻舌身意觸是所計是假合有運動乃至一切無常無恒有變有易都無實性故此大乘是尊是勝是上是妙超勝一切世間天人阿素洛等復次善現若眼觸為緣所生諸受是實是諦如所有性一切常恒無變無易有實性者則此大乘非尊非勝非上非妙不能超勝一

図四 宝集寺本『大般若經』卷417

めて比較検討をさせました。その結果、両者には違いがなかったので、長年の疑いが晴れたとクビライは喜んだ、と記録に書かれています。そして、その校勘結果を『至元法宝勘同総録』という目録一〇巻に編纂しました。これを略して『至元録』といいます。

また「帝、天下を統一するや、外邦他国、至化に帰す。

帝は大蔵經三十六藏を印して、遣使して分賜せしめ、皆仏日を瞻るを得しむ」と書かれています。ここで問題になるのは、世祖が印造した大蔵經とは何かということ。小野玄妙は「大元国ともいわるものが天下統一の記念として国内ならばともかく、外邦他国への国際的賜物として、まさか棚ざらしの古物然、それも金代に彫刻されたものなどを使用するはずは絶対にあるまいと思はれるから：新しく雕造したものであらうと思ふ」と書いています。つまり、この三十六藏は世祖が更めて大蔵經を作ったのであらうということ。実は色々な記録のなかに『弘法藏』という名称が出てまいります。その実物は現在まで出てきていません。そのために、『弘法藏』とは何かということが常に問題になってまいりました。小野玄妙は新しいものを作ったのであらうと言うのに対して、近年の学者たち、サキヤ寺で『宝集寺本』を発見した北京大学の宿白教授や李富

華という北京図書館で『金藏』の整理に当たった人などは、『金藏』の補刻本がこの『弘法藏』である、と述べております。私もそちらがよいのではと思っておりますが、何分にも「これこそが『弘法藏』である」というものが今のところまだ現れていません。いずれそれが出てくることを期待したいと思います。

しかしそれに近いものが発見されています。中国では『延祐藏』と呼ばれているものです。これは、一九八四年に北京にある智化寺の仏像の胎内から発見されました。記録でも、元の仁宗の延祐三年（一三一六）に三十六藏を刊印したということですが、その離れとみられます。每版二三行、行一四字、千字文帙号は『至元録』と一番違いのものです。この智化寺は北京の旧城内にあって、こぢんまりした寺です。明代の宦官が建てた寺で、現在では仏教音楽でよく知られています。この仏教音楽は、明代の宮廷音楽を受け継いでいるものだといわれています。ところで『金藏』系統のものだけが、一行一四字の版式になっています。『金藏』系統とは『開宝藏』、これは北宋始めにつくった大蔵經の流れを汲むもので、『高麗藏』もそのなかに入ります。この智化寺で発見されたものは一四字ですので『金藏』系統であることだけは確かです。ただし、千字文帙号

は『金藏』とも『至元録』とも違います。したがって、これが『弘法藏』であるとは言えません。しかし、これは宮廷で作られたということですので、『弘法藏』の流れを汲むものであるということだけは確かに言えます。こういうものが発見されたことにより、『金藏』から延祐年間のものまでの一つの系譜をたどることができるわけです。

文献によると、『慧印、皇慶初(二二二二)詔をもって、弘法寺において諸經鈔疏を讎校せり』とあります。つまり、弘法寺では、皇慶初にも版木が置かれていたということを確認することができます。

次の英宗朝(一一三二〇―一一三三三)の時期でも、この時期に活躍した僧たちの伝記によりますと、慧印や法洪、性澄、西谷らが大藏經の校勘を命じられています。また同じ時期に、銅版での大藏經出版の計画もありました。しかし、これが出版されたかどうかは分かりません。恐らく無理であっただろうと思います。ともかく、宮廷において、大藏經の校勘が引き続き行われているのです。文宗の時期(一二二九―一二三三)にもやはり三十六藏を印造したという記事があります。どうして三十六という数字になるのでしょうか。仏教の方で何か特別の意味があるのかもしれないかもしれません。その後、彼の皇后ブタシリが後至元二年(一二三三六)

に大藏經を印造しました。それは太皇太后になったブタシリの願文があります。その願文については小野玄妙の最初に掲げた論文のなかに紹介されています。それは東京中谷在禪氏の所蔵となっており、どうやら願文の部分だけが一九三〇年代に日本にあったようです。ただ現在では、それがどこにあるのか、私は存じません。

ところがそれと同じ願文を付したものが、一九七九年に、今度は雲南図書館で三二巻発見されました。每版が七折の折本で、四二行、行一七字のもので、紙は綿紙です。そして「大德寺藏」という長方印が押されています。雲南は辺境ですが、元代から仏教が盛んになったところで、例えば普瑞という華嚴宗の僧も現れています。彼は今も残る『華嚴懸談会玄記』という本を著しました。ですから、雲南と大都との関係は密接でした。これには「大德寺」という印があり、報告者は「大德寺とは昆明に今もある寺だろう」と記していますが、そうではなく、これは今の北京にあった名刹のことだと思われれます。この経巻が発見されたのが一九七九年で、報告されたのが一九八四年です。

ちょうどその頃、日本でも同じ版のお経が発見されました。一九八三年に村井章介氏、当時は東京大学の史料編纂所におられ、現在は文学部教授の日本史の方です。彼が対

馬の仁位東泉寺で『八十華嚴』の同じ版のものを発見しました。つまり、中国で『元官藏』と言われている、雲南図書館から発見されたものと同じ版の『華嚴經』です。この報告は一九八六年『仏教史学研究』二八一―二に発表されました。中国でも日本でも同じ時期に同じ版経が発見されたことは奇遇を感じます。この対馬という所は、東アジアの文化交流にとって非常に重要な地点で、宗氏が殿様でした。朝鮮通信使がやってくるとまず対馬に上陸して、そこで接待を受けて本州へ行つたらしいです。ですから、対馬には朝鮮国からの色々な文物がたくさん入っていたようです。

この『華嚴經』の末尾には、明の建文三年の墨書があります。これがどういふ経路で対馬に入ったのかはわかりませんが、恐らく朝鮮半島を通じて入ってきたのではないかと思います。私も村井さんの紹介を受けて対馬の歴史資料館に行き、これを見せてもらいましたが、見た途端にこの版は他の藏經本とは全く違うなという印象を受けました。紙は白綿紙で、サイズも大きい。これはやはり官版である、とすぐに分かりました。一番の特徴は上下の界線が二重線(子持野)になっていることです。

実は京都にも『華嚴經』巻五一、巻七二を持っている方がいます。したがって、対馬だけではなく、日本の中で

も『元官藏』と呼ばれている『華嚴經』が伝わっていたことが分かります。『華嚴經』ばかりが出てきたというのは不思議ですが、日本には『華嚴經』しか入ってきていないのかもしれない。

それでは、これはどこで出版されたのでしょうか。同じく『官版』ではありますが、前の『金藏』とその補刻とは違い、一行一七字という版式になっています。この版式は江南系です。しかし、願文の後に付した僧俗の関係者名簿を見ると、だいたい華北の人々です。ということは、これは大都の辺りで出版されたことが考えられます。しかし、その確証は得られていません。ともあれ、『金藏』の系譜のものほかに、官廷では大藏經の校勘が行われ、後至元代になって新しい『官藏』が作られたという系譜がたどれるようです。しかし、この大藏經の系統はその後に伝承されてはいないようです。ここまでが元代大藏經の北の流れということが出来ます。

それに対して、南の方はどうでしょうか。小野論文にありますように、一番有名なものは『普寧藏』です。南山大普寧寺は白雲宗の寺で、白雲宗というのは北宋末にできた新興教団です。南宋時代には邪教として弾圧も受けました。ところが元が江南を征服すると、宗王道安は早速クビライ

のところへまいりまして白雲宗の公認をとりつけました。そして、至元一四年(一二七七)から二十七年にかけて大蔵經の出版を行いました。しかし白雲宗は、その後も何度か弾圧を受けて、明の始めには正式に邪教と定められ、姿を消してしまいました。元代には、長江下流域の穀倉地帯に多くの信者を集め、非常に裕福な教団であったようです。しかも普通の仏教教団とは違い、半俗半僧でありました。その教団で作られたこの『普寧藏』というのは、当時、国内においては、山東の靈巖寺や陝西の法門寺など、華北地方の諸寺が経藏を作ると、わざわざ杭州まで行つて、大蔵經を印刷して持つて帰っています。それだけではなく、高麗王璋は中国の名山に『普寧藏』五〇藏を寄進しました。この王璋の寄進した『普寧藏』経卷は南禅寺にもありますし、智化寺からも発見されています。また高麗の李允升夫妻が『普寧藏』を印刷して高麗の菩提寺に施入しています。その経卷は本学にも所蔵されています。このように、高麗の人々もこれをよく印刷しました。また、日本にも多く伝来していて、南禅寺や安国寺、西大寺などに所蔵されています。この大蔵經は日元間の重要な貿易品でありましたが、かなり廉価版であったようで、版そのものはあまり良くありません。それから、西大寺の調査の時に専門家に紙を調

べてもらったところ、全部竹紙でした。内閣文庫にある南宋の文集の卷末に上質紙いくら、中質紙いくら、というように値段表が書いてありますが、竹紙が一番安い紙で、確かな上質紙の半額以下だったと思います。したがって、この『普寧藏』は安く手に入りますので、日本でも貿易品として盛んに輸入したようです。この雕造は至元二十七年(一二九〇)に一旦終わりますが、最近の調査によればそれ以後も補刻や追雕が行われており、大徳一〇年(一三〇六)にはチベット僧の管主八が秘密經典を刊印するなど、その後も追雕がありました。日本に来ていたものはほとんど至元二十七年に出来上がったのを輸入しているものですが、西大寺のものにはその後補刻した部分が含まれています。ともあれ、この大蔵經を出版した普寧寺は、元末明初の戦いで焼失しました。それと同時に経版も焼失したようで、元と共にこれはなくなりました。

もう一つが『磧砂藏』と言われるものです。これは南宋の嘉定九年(一二一六)に開版されました。これまではもう少し後の時代から始まったように言われていたのですが、西大寺にあるものから、最初の開版は嘉定九年であるということが分かりました。このことは梶浦君の論文で紹介されています。宋元間の戦争のために中断しましたが、大徳

元年に再び開版され、朱文清、張文虎の二人も寄進を行っています。彼らはもともと海賊でしたが、世祖に取り入って、元代では海運業を一手に引きうけ巨万の富を蓄えましたが。あまりにも大きくなりすぎたために朝廷からならまれて、財産没収になりました。朱張の籍没事件として非常に有名です。その籍没される直前に、この二人は大藏経の開版費用の寄進を行っているのです。それから管主八が大徳一〇年に一千余巻を雕刊したということも知られています。そして至正二三年（一三六三）に、子の管憐真吃刺が経版一部を磧砂寺大藏経坊に捨入したという記事も知られています。この『磧砂藏』も元代を通じて続々と追雕されています。この大藏経は一九三〇年に西安の開元寺と臥龍寺とに所蔵されていることが分かり、それを中国で『影印宋磧砂藏経』として影印出版されました。『磧砂藏』が開版された場所は蘇州です。この大藏経のうち唯一日本にまともなところであるのは、大阪の十三にある武田薬品の杏雨書屋、この所蔵本です。これは対馬の宗氏が持っていたものです。四五四八冊が現存しており、現在整理中ですが、これは元版の方のようです。

ところで、一九六六年に紅衛兵が北京柏林寺大殿の仏像を破壊した時に、その中から経巻が出てきました。それが

北京図書館へ移管されて、善本部で整理が行われました。つい最近の李際寧氏の論文によりますと、前述の『金藏』を最初に北京に運んだ時の事情について記した資料がこの中から発見されたとのことです。この柏林寺から出てきたものは、明の永樂七年（一四〇九）から一〇年の間に補刊し、宣徳年間（一四二六―一四三五）に印刷したものということです。したがって、この『磧砂藏』はこれまで元代までとみられていましたが、実は明代になってからも印刷されてきました。版木は長くもちますから、例えば黄檗の一切経でも現在も刷っています。明代になると、南京では『南藏』が洪武と永樂年間に作られ、北京では『北藏』が作られました。そういう明の『南北藏』は『磧砂藏』の系統です。ですから、それらができると、もとの『磧砂藏』はいらないのではないかと思いますが、実は並行して印刷されていたということが最近分かってまいりました。

その他にも元代には小藏経ともいうべき、小規模な藏経が作られています。湖州呉興の妙巖寺版や福建建陽后山報恩万寿堂の白蓮教の藏経などです。またトルファンから出土した版経もかなりあります。例えば、ベルリンの旧ドイツアカデミー東洋学研究所には、ル・コックの収集した仏典が多く所蔵されています。私は一九七六年に二〇日間ほ

どその調査を行いました。そこには写経のほかには版経がかなりあります。何とかその版経の素性が分からないかと思つていたのですが、当時は全然分かりませんでした。現在でも元代のものであることは確かで、大蔵経の離れのように思われるのですが、とにかく断片ですので、どの系統のものか分からないものがたくさんあります。これからの研究課題にしていかねばならないと思つています。

最後にまとめとしまして、元代の大蔵経に二つの系統がある、ということはお分かりいただけたかと思つています。私は宋から元の時代には、北と南の二つの流れがあるということを主張してまいりました。それを実証するのが仏教文化である、ということから研究を進めてまいりました。この元版の大蔵経についても、北と南の二つの系統がみられることが、現物によって確かめられるようになりました。それと同時に、大蔵経に見られる東アジアの文化の状況とは、つまり元官版の大蔵経にしても、『普寧藏』にしても、中国だけではなく、その当時の高麗や日本にも広く流伝しています。大蔵経に限らず、他の仏典についても文化交流の跡をたどることができます。このように大蔵経を含む仏典は、この時代の文化史料として非常に貴重であることを、改めて知ることができるようなのです。

また大蔵経というのは中国の宋版、元版になるわけですが、中国の伝統的な学問では版本学があります。これは中国学の基礎学となるべきものです。宋版や元版は宝物視されてよく研究されていますが、中国学者は仏教文献を毛嫌いするので、大蔵経は宋版元版の貴重な材料であるにもかかわらず、伝統的な中国学では見向きもされませんでした。一方、仏教学者の方では、中国の版本学に対する理解がないことから、大蔵経の版本研究はほとんど進んでいませんでした。例えば、小野玄妙の「經典概論」や『仏典研究』の論文でも、大蔵経の中味や構成については述べられていますが、版本がどうであるかということは全然触られていません。つまり、中国学からも仏教学からも、大蔵経の版本研究は行われていませんでした。版本研究にはある一つのものがあったて、それが復刻されていく過程なり系統をたどる、という仕事があるわけですが、大蔵経の解説の場合には、年代順に並べていくだけで、どういう系統があるのかということを調べたり、説明したりするということはなかったわけです。

私は若い時に版本学の手ほどきを受けたこともあって、大蔵経を版本学的に分類していけばどうなるだろうかということを試みてみました。その結果、宋元版に三つに分類

できることがわかってまいりました。最近になって、大蔵經の研究も非常に盛んになり調査が行われるようになりました。特に文化庁もかなり乗り気になっていて、各地で色々な調査報告が出てきています。それによって、それぞれの大蔵經のデータが詳しく知られるようになってきていますが、ただ調査に当たっている人は、日本史関係の人が中心になっていくことが多いのです。西大寺のものもそうです。その紙の長さがどうであるとか、刻工名がどうであるとかというような調査は詳しくされていますが、版木がどういふ状態で、同じ版であつてもどちらが古いものかというような比較などはまだ行われていません。実は本学には『思溪藏』という大蔵經があります。この『思溪藏』も日本に多く来ていて、東京の増上寺にも所蔵されています。先日、本学の『思溪藏』と増上寺の『思溪藏』とを比べる機会がありました。見てみると、補版のところまで一緒なのです。したがって、本学と増上寺の『思溪藏』はどうか同じ時期に印刷されたものであるらしいということが確かめられました。ところが『思溪藏』に関する論文は多く出ていますが、そのようなことについては一言も触れられていません。このことから、ただ表面的なデータを集めるだけではなくて、版をきっちり比較していくという作業

が必要になってくるように思われます。それは非常に地道で根気のいる仕事ですが、これからの大蔵經研究はそのような方向に進んでいく必要があると思っています。

雑駁な話でしたが、このへんで終わりにさせていただきます。

〔編集委員会付記〕

同日、東京理科大学生命科学研究所所長 多田富雄氏（免疫学）による「生命をどうとらえるか」と題する講演も行われた。多田氏の講演では、生命は単なる遺伝子の乗り物と考えるのではなく、遺伝子情報による自己複製の原理は保存しながら、外界からの情報を取り入れて多様化していく、すなわち自分で新しい自分をつくり出す、「スーパーシステム」と考えられること、その場合、人の「死」は、いわゆる死の遺伝子のはたらしによって要素が破壊されていくだけでなく、スーパーシステムという相互依存的な関係として成立している高次の生命体の一部の要素が破壊されることによって、スーパーシステムとしての生命の自己崩壊と考られること、などが示された。なお、講演要旨の掲載は事情により割愛するが、講演内容は多田富雄著『免疫の意味論』（青土社、一九九三）で論じられているので、関心のある方は参照されたい。